

# 博士学位論文審査要旨

2012年7月4日

論文題目： 『沙石集』の思想と説話の方法

学位申請者： 加美甲多

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 廣田 収

副査： 文学研究科 教授 植木朝子

副査： 文学研究科 教授 駒木 敏

要 旨：

本論文は、鎌倉時代の禅僧無住の著した仏教説話集『沙石集』を考察の対象とする。諸本研究は国文学研究の基礎をなすものであるが、『沙石集』には諸本間に著しい異同が認められる。本論文は、諸本の表現について詳細な比較検討を行い、かつて『日本古典文学大系』の底本として採用され最善本とされてきた梵舜本（お茶の水図書館蔵 成篁堂文庫旧蔵）が、実は江戸時代の慶長一〇年本などの流布本系統に近い、後代の改変本であり、むしろ米沢本（市立米沢図書館蔵 興譲館旧蔵）が古態をとどめるものであることを明らかにした。これは、従来からの研究史を覆す歴史的な成果である。

このように伝本の評価を改めることによって、『沙石集』を特徴付けるとされる「笑い」はむしろ、後代の伝本である梵舜本において付加、増幅された属性であると指摘する。

さらに、仏教説話集が伝統的に仏教教義・教理を教化するという立場をもつとされるのに対して、『沙石集』は、現世の道理には仏法に通ずるものがあるという独自の思想をもつことを指摘する。このような思想が、鎌倉新仏教の台頭・隆盛する時代にあつて、大乘小乗を超え、禅・律の対立を超え、特定の宗派・教団に拘束されずに仏法を説く『沙石集』の核心をなすという。そして、このような思想を、漢訳比喻経典の中でも、特に『百喻経』を引くことによって平易に、かつ「笑い」をひとつの方便として説くところに、他の説話集には見られない『沙石集』独自の説話の方法が認められると指摘する。

本論文は、このような仮説を、豊富な用例をもって例証するとともに、無住の別の著作である『雑談集』『聖財集』だけでなく、同時代の『直談因縁集』『古今著聞集』などをも参看することによって、無住の説話の方法の独自性を確認している。

上記の仮説はいずれも、本論文によって始めて論証されたものであり、その成果は学界において支持されるだけでなく、今後の中世文学や説話文学研究において、新たな領域を開いたものとして高く評価できる。

したがって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2012年7月4日

論文題目： 『沙石集』の思想と説話の方法

学位申請者： 加美甲多

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 廣田 收

副査： 文学研究科 教授 植木朝子

副査： 文学研究科 教授 駒木 敏

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年6月27日、午後5時から約2時間にわたって、扶桑館102教室において、公開で、学位申請者に対して口頭試問を行った。

学位申請者は、提出論文について審査委員3名から出された研究内容に関するさまざまな質疑に対する的確に答えるとともに、専門分野における深い学識を示した。と同時に、本論文の研究水準の高さと学術的な価値を証明した。さらに、学位申請者は語学（英語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士学位論文要旨

論文題目： 『沙石集』の思想と説話の方法

氏名： 加美 甲多

要旨：

梵舜本を中心とした『沙石集』諸本関係を契機として、『沙石集』における無住の思想と説話の方法について検討してきた。

第一章第一節では、これまで『沙石集』の草稿本であるという見方が大勢を占めてきた梵舜本の本文内容について、米沢本や慶長一〇年本等の他の伝本の比較検討を行った。梵舜本は慶長一〇年本等の流布本系統に近い本文内容を有し、米沢本は慶長一〇年本等の流布本系統に遠い本文内容を有していることを確認した。後出の本文内容を有する流布本系統に近いという点で、梵舜本は『沙石集』の草稿本ではないと考える。

第一章第二節では、梵舜本が無住の手による改稿本か否かを明確にするために、無住著作や梵舜本と他作品の本文内容の比較検討を行った。具体的には『沙石集』諸本に共通した説話と『百喻経』『直談因縁集』の比較、『雑談集』と『古今著聞集』の比較を行った。他作品と比して無住著作は説話の人物規定や感情の推移等を克明に描いており、笑話を用いる場合にも読者や聴衆を仏教的価値観へ導こうとする無住の姿勢が看取できる。一方で、梵舜本独自説話と『直談因縁集』の比較から、梵舜本は本文内容に笑いの要素が多く盛り込まれており、仏教的価値観へ導こうとする姿勢は全く認められない。

第一章第三節では、梵舜本と他の『沙石集』諸本に共通した説話に絞って、本文内容や構成の比較検討を行った。『沙石集』諸本には異同が認められない本文内容や構成が梵舜本のみで改編が施されており、梵舜本は他の諸本と比して極めて特異な伝本である。その梵舜本の改編の在り方としては、仏教的文脈が平易な表現へと改められている。それは同時に梵舜本の教説部分への関心の低さも示している。『沙石集』諸本に共通した説話における非常に微細な本文内容の改編までも梵舜本という伝本のみで限定して無住が施したと考え難い。

第二章第一節では、『沙石集』の笑いについて検討した。『沙石集』においては、「山寺」という空間が極めて重要であり、笑いの対象となるシンボルとしての役割を果たしている。「山寺」は当時、墮落した僧が住む空間という共通した認識があったと考えられ、それを利用することで読者や聴衆を説話の中に引き入れようとする無住の姿勢が看取できる。また、『沙石集』では、それまでにはなかった新しい笑いの型が存在する。笑う側、笑われる側の対象を変化させることや、読者や聴衆を説話内における笑う側と見なすことで、笑いに重なりや厚みが生じている。

第二章第二節では、『沙石集』に認められる愚者を主として検討した。『沙石集』においては、愚者の愚直なまでの愚行が「信心」として賢者に転じる用例や、逆に賢者ぶろうとする者が一瞬にして愚者に転じる用例が認められる。これらにおいては価値観の転換というものが行われてい

る。こういった固定化されることのない賢者と愚者の逆転は、誰でも賢者にも愚者にもなり得ることを示し、仏道修行に励むべきであるという無住の仏教的価値観に通底している。その意図は『沙石集』諸本に共通した説話における話末評語からも伺えるが、梵舜本独自説話においては無住の意図とは異なる愚者が登場し、話末評語の在り方も異なっている。

第三章第一節では、『沙石集』における譬喩經典受容について検討した。無住著作は複数の譬喩經典を受容しているが、その中でも『百喩経』を用いていることの意味は大きいと考える。『沙石集』は『百喩経』の手法との類似が認められ、それが我が国において他に類を見ない啓蒙的思想と笑いの要素の混在という『沙石集』の手法に影響を与えた可能性がある。その点で、無住著作における笑いの要素を有する説話は笑話として見るのではなく、譬喩經典等を媒介とした譬喩説話として見るべきである。一方で、梵舜本独自説話の中には譬喩説話の域を脱し、笑いの要素に主眼を置いた笑話と捉えられる説話が複数存在する。

第三章第二節では、『沙石集』における譬喩經典受容をより明確にするために、『百喩経』以外の譬喩經典との関係性について検討した。具体的には『増一阿含経』や『雑宝蔵経』等に認められる「難陀」の譬喩説話受容について検討した。『沙石集』においては譬喩經典を受容しながらも、譬喩經典の「偈」をもとにした新たな譬喩説話が織り込まれている。それが「阿難」の譬喩説話であり、「阿難」の行為を通して無住の戒律に対する思想が看取できる。この無住の思想を織り込んだと考えられる「難陀」の譬喩説話は、『沙石集』諸本の中で梵舜本のみ削除されている。

第三章第三節では、主として『沙石集』諸本と譬喩經典の関係性について検討した。『沙石集』においては譬喩經典の説話を連続的に用いながら、後ろにまとめる形で教説が展開される場合がある。これは重層的な教説と呼べるものであり、譬喩説話が重要な役割を果たしている。この手法は『雑談集』にも認められる。梵舜本においては、連続した譬喩説話や重層的な教説が遮断されてしまっている用例が認められる。

第四章第一節では、『沙石集』巻第二ノ一の説話構成から見た『沙石集』諸本関係、また『百喩経』と『聖財集』『雑談集』との関係性を通して、それらに認められる無住の手法について検討した。本文内容や説話構成の面から梵舜本は改編本、それもかなり時代を下った後出本であると考え、無住の手から離れた後人による改編を経て現存の形となったと考える方が自然である。その生成は新出の『沙石集』伝本である大永三年本の生成と近い時期であった可能性も検討すべきである。梵舜本の具体的な生成の場として、民間の説教唱導の場、狂言といった芸能の場、笑話集編纂の場というものが想定できる。

第四章第二節では、『沙石集』と『沙石集』の改編本、抜書本、関連本との比較検討を行った。『沙石集』の改編本、抜書本の一つである『金撰集』は『沙石集』の本文内容を忠実に踏襲しながらも、異なる『沙石集』伝本の説話部分と話末評語をつなぎ合わせるといった独自の改編の在り方が認められる。例えば梵舜本独自の笑話と米沢本に載る別の説話の教説を結合させており、笑いの要素が仏教的価値観を有した譬喩説話へと意図的に改められている。その点で笑いの要素を掲載した無住の意図を受け継ぐものとなっている。『沙石集』受容の背景には、宗派に寛容な

無住の姿勢や後人に「添削」を求めた無住の叙述等が挙げられる。そして、『沙石集』の改編本、抜書本の多くは室町期から江戸初期に創出されている。特に一五世紀後半から一六世紀にかけて『沙石集』は多く受容されており、『沙石集』の「思潮」というものが看取できる。その流れの中に『沙石集』伝本を置くことは可能である。梵舜本巻第六や巻第八のような特異な本文を有する伝本についてはそういった改編の場を想定することこそが有効であると考えられる。従来論じられてこなかった『沙石集』の改編本、抜書本が梵舜本本文の方に影響を与えたという視点が必要となる。

以上から、まず梵舜本は見直されるべき伝本であると考えられる。梵舜本は『沙石集』の草稿本ではなく、無住の改稿作業の一環にも含まれない伝本であると考えられる。その改編は大きく時代を下った室町期が想定できる。室町期には『沙石集』の改編本、抜書本が多く成立したと考えられる。この『沙石集』再生産の流れは『沙石集』の伝本にも影響を与えた可能性が大いにある。特に梵舜本のような極めて特異な伝本はその流れと重ね合わせるべきである。梵舜本を位置づけることで、初めて見えてくる無住の思想がある。それは即ち、無住には笑いを目的とした笑話を創作する意図はなく、あくまで啓蒙的思想を伝達する手段の中に笑いの要素が含まれていたと考えるべきことである。従来は梵舜本独自笑話の存在が大きく取り上げられてきたことから、笑いの要素を用いた無住の意図が判然としない部分があった。しかし、それらを後世における享受者の改編として取り除けば、宗教者としての無住の思想は一貫したものとなる。もちろん、梵舜本という伝本を除いても、自らの仏教的思想と同列に笑いの要素を用いた無住の手法は『沙石集』諸本に共通して認められる。これは我が国の文献、特に仏教説話集においては他に類を見ない独自の手法である。